

# “声”のプロフェッショナル

## — アナウンサーの職能の変遷 —

The “Voice” Profession:  
Changes in the Professional Skills of Announcers

北出 真紀恵

Makie KITADE

キーワード： “声”、アナウンサー、標準語、『アナウンス読本』、規格化、職能  
Key word : “Voice”, Announcer, Standard language, *Announce Dokuhon*  
Standardization, Professional Skills.

### 要約

本稿の目的は、アナウンサーとは何かを考察することである。これまでのアナウンサー研究のなかで職能についてはほとんど言及されてこなかった。本稿では、公刊された『アナウンス読本』を中心にアナウンサーの専門研修を概観することによって、アナウンサーの職能の変遷をたどり、現在のアナウンサーの職能について検討する。初期アナウンサーの職能は「標準語の伝え手であること」であった。研修が洗練され、“声”が規格化すると、アナウンサーには「個性」が要請されるようになった。そして、技術革新を背景に、「きく」「レポート」という職能が増加した。

現在のアナウンサーは基本的アナウンス技能だけではなく、多様化し、専門化した放送の送り手であることが求められている。放送文化のなかで、アナウンサーはいつも新しい型を作り出す開拓者であった。アナウンサーの行く手には困難が待ち受けているが、今後も新しいジャンルをきりひらく開拓者であり続けることを期待したい。

### Abstract

The aim of this paper is to consider what an announcer is. So far the study of announcers has been superficial, and little attention has been given to their professional skills. I will examine the professional skills of announcers today, tracing the changes in their skills by referring to *Announce Dokuhon*. In the beginning announcers were considered to be transmitters of the standard language in Japan. The method of their vocational training was refined and their “Voice” was standardized. So the “Voice” was requested to have an attractive personality. Due to technological innovation, announcers had to be “interviewers” and “reporters”.

Nowadays announcers need new skills. They need not only to have basic skills but

also to be broadcasters in multiple and specialist fields. In broadcasting, announcers have stepped into new areas and made new genre consistently. In the future many difficulties will still lie ahead of them, but I have high expectations that announcers will be at the forefront of innovation.

## はじめに

アナウンサーとは何か。アナウンサーのプロフェッショナルの条件とは何か。本稿では、アナウンサーがどのように教育されてきたのかに着目し、その変遷をたどることによって、アナウンサーの「職能」について考えてみたいと思う。

ラジオデイズ、そしてテレビの黄金時代、現在の多メディア時代においても、放送文化のなかでアナウンサーは常に重要な役割を担ってきた。放送におけるアナウンサーの役割と社会から寄せられる期待は、時代とともに変化してきており、昨今の「女子アナブーム」にみられる「アナウンサーの有名化」に対する批判は、まさにアナウンサーとは何かを問う一つの契機であるともいえよう。<sup>(1)</sup>

これまでの放送研究のなかで、アナウンサーという職業人に光をあてたものとしては、ニュースの送り手としての女性の分析（小玉、1989）や放送の女性史（小玉、1996）、女性ラジオパーソナリティの役割分析（北出、2002a）など、女性放送者に関するジェンダーの視点による研究の蓄積があり、また、『アナウンサーたちの70年』（NHK アナウンサー史編集委員会、1992）や『放送ウーマンの70年』（日本女性放送者懇談会、1994）をはじめとして、現場の職業人たちによって編まれ、アナウンサーの歴史をつづったものはあるが、「職能」という視点からアナウンサーという職業を捉え返し、整理されたものはみあたらない。<sup>(2)</sup>

デジタル化を迎え、番組編成の多様化や多チャンネル化によって、アナウンサーの職域は拡大し続けている。放送産業における労働問題という観点からは、アウトソーシング化がますます進むであろうことが予測されるため、アナウンサーの職能の評価軸を標準化および透明化することは急務であると考えられる。

アナウンサーの専門教育は、一般的に、入社〈NHKは入局〉後、社内〈局内〉において一定期間の研修が行われる。それぞれの放送局による研修用テキストおよびメソッドが存在するが、本稿では、公刊されているアナウンス教本である『NHK アナウンス読本』を参考資料として取り上げることとした。『NHK アナウンス読本』は、1941年、中村茂・告知課長（2、26事件における「兵に告ぐ」の放送や太平洋戦争開戦証書奉読のアナウンサー）によるもの、1945年、浅沼博・アナウンス課長によるものが部内用として作られ、一般の人々から「話しことば」の習練についての問い合わせやアナウンサー養成テキストの注文がNHKにあいついだことを受け、『アナ

ウンス読本』(1955)が初公開された。続いて『テレビラジオ新アナウンス読本』(1962)、内容を改編して『NHK アナウンス読本』(1970)、『NHK 新アナウンス読本』(1980)、『NHK アナウンス・セミナー』(1985)、そして『新版 NHK アナウンス・セミナー～放送の現場から』(2005)へと引き継がれ、約70年の歴史をもっている。これらの読本がアナウンサーたちに何を伝えようとしてきたのかを、その歩みとともに検討することによって、放送史のなかでアナウンサーたちがどのようにその専門性を生きていたのかを探してみたい。

なお、1955年以前の『アナウンス読本』については非公刊のため、NHK アナウンサー史編集委員会によって編まれた『アナウンサーたちの70年』などを参考とすることにした。ちなみに、アナウンサー教育については、民間放送開局時には、何人もの NHK アナウンサーたちが民間放送に移籍し、その教育にあたるなど、日本の放送のアナウンスは、NHK が戦前から洗練させてきたアナウンス表現がその礎を築くこととなり、『アナウンス読本』は昔も今も、アナウンサー関係者なら誰もが知るアナウンス教本である。

## 1. アナウンスへの模索—アナウンサーの誕生

アナウンサーという仕事は、放送メディアの誕生とともに誕生した新しい職業であった。むろんアナウンスの基準はない。1925年開局当時のアナウンサーたちは、新聞記者、教員や歌手などの前歴を生かしてマイクロホンの前に立った。<sup>(3)</sup> それぞれのアナウンサー一人一人の試行錯誤の末、その個性を発揮することによって、聴取者の支持を得るものも中には存在したが、その一方で、放送当初から地域訛りのある言葉に対する批判も出ていた。放送への関心が高まると同時に、放送から流れてくる“声”がどうあるべきなのかが議論されるようになる。論点はあくまでも「訛り」であり、「話しことば」への言及はまだなされていない。

以下は、1929年4月29日、天長節の観兵式を中継放送した AK 東京放送局松田義郎アナウンサーのアナウンスの最初の部分である。

「ただいま、式場に参列の諸隊は、近衛、第一の両師団中、東京に屯在致しまする十八個団体、総員一万五千名でありました。諸兵指揮官、宇垣一成大将最右翼に、近衛師団長、長谷川中将その左方約二十歩に位置し、近衛歩兵四個連帯は、式場東側に、歩兵第一、第三連帯、並びに騎、砲、工、輜重の書く特科隊は、その左に整列し、軍装美しく、威儀を正して、陛下のご来臨をお待ちしております。」(『アナウンサーたちの70年』1992、p28)

敬語、漢語表現、そして文語的な言い回しが頻繁に登場する。このように、昭和初期までは、

演説にも文語的な表現がまだ色濃く残っており、放送という話しことばの分野にも、文語調が大きな影響力をもっていた。

1930年になって、東京放送局は第二放送の開始や各地の放送局の誕生に備えてアナウンサーを募集した。そのうちの一人である米良忠磨は出版や編集の仕事の経験があり、1932年2月の雑誌『調査時報』で話しことばの標準のない時代のアナウンサーのあり方について語り、「ことばについての組織的な調査」を待望している。米良の要望とは、1. 漢字ならびに外来語の正しい読み方と普及されている読み方の選択の基準、2. 固有名詞の読み方、3. 東京の方言と正しい言葉の区別の基準、4. アクセントの問題をあげ、以上の問題を解消するために、標準語の講習を受けたいというものであった。放送のことばの改善調査は、2年後の1934年に始まることとなる。「放送用語並びに発音改善調査委員会」は、現在のNHK内部で放送の言葉を審議する機関「放送用語委員会」の前身である。この委員会にはやがて、新村出（アナウンサーの採用試験委員・『広辞苑』の編纂にあたった言語学者）、金田一京助（国語学者）らが加わり、放送のことばの調査改善が急速に進むこととなった。（『アナウンサーたちの70年』1992、pp40-42）

## 2. 標準語の伝達者として

「だれにもわかることば—この条件をみたまものは標準語です。アナウンサーは話の内容を伝えるという、アナウンスの目的を達成するために標準語をつかわなくてはならないのです。」（『アナウンス読本』1955、p1）

### 2-1. 一期生とアナウンス学校

アナウンサーの採用は中央放送局ごとであったが、そのため、受験者の資格、採用方法などかなりの違いがあった。最大の問題は、地元出身者が多いため地方訛りがぬけず、聴取者からの批判が多く寄せられたことであった。放送協会内部の組織の統一やことばの標準化の問題もあり、アナウンサーはすべて東京で採用しようという機運があがり、第一回の採用試験が1934年1月、東京で行われることになった。この試験の中から和田信賢、浅沼博といったすぐれたアナウンサーが誕生する。浅沼は、のちにアナウンサーの管理者として昭和10年代の終わり頃から20年代にかけての新人アナウンサーに影響を与え、また同期採用である山村恒雄は、昭和20年代後半から30年代にかけて、ラジオからテレビに移り変わる時代のアナウンス部のリーダーとして新人を指導することになる。<sup>(4)</sup>

放送のことばは標準語であるべきで、その標準語とは東京のことばを基本として成り立っており、標準語を操るという特殊な技能を修得しなければならないアナウンサーには東京在住者（出身者）が適していると考えられていた。

新人養成は、これもまた初めての試みで3ヶ月間行われることになった。

この新人養成は、「アナウンサー学校」と呼ばれるようになる。「アナウンサー学校」は、全国でアナウンサーを募集したのが初めてであったことと、3ヶ月にわたって、東京慈恵会医科大学に教室を借りて授業が行われるとあって、マスコミの話題となった。

「アナウンサー学校」の授業内容は、放送の使命や放送番組の概要についての話に始まり、音声学、演劇、株式、商品取引、新聞などジャーナリズム一般、国際情勢などの講義や実習であった。講義には作家・久保田万太郎の文芸、町田嘉章の邦楽や民謡、音楽評論家堀内敬三の洋楽全般などがあり、アナウンサー採用試験委員でもあった東京文理科大学教授・神保格の標準語論、東京外国語大学教授・千葉勉の音声学は3ヶ月を通じて行われた。こうしたカリキュラムは、これからのアナウンサーは、標準語や音声学について基礎的な知識が必要であるということのあらわれであった。（『アナウンサーたちの70年』1992、pp58-64、長島、1952）

## 2-2. アナウンスの教科書『アナウンス読本』

アナウンスの表現技法については、暗中模索が続いていた。

放送草創期のアナウンスは、マイクロホンの感度も悪く、大きな声で叫ばなければならず、遠くにいる聴取者に伝えるためには「大きな声」をはりあげなければならないと考えられており、「絶叫調」とよばれた。マイクロホンなどの技術の進歩により叫ぶ必要がなくなるにつれ、「淡々調」と呼ばれるアナウンスの表現技法が主流をしめるようになっていた。しかし、アナウンサー学校ははじめアナウンサーの養成における実習は、先輩アナウンサーの経験とそれを伝授するという方法がとられていただけであり、めざすべきアナウンス表現の規範がない。そこで、アナウンスの教科書を作ろうという動きが部内で高まることとなる。

中村茂・告知課長のもとで、1940年の1月『基本アナウンス』、続いて9月に『改訂アナウンス』、さらに翌年、これもあくまでも部内用であるが『アナウンス読本』が完成する。この『アナウンス読本』は78頁の小冊子で、第一課は発音基礎、第二課は応用実習であった。参考にされたのは、BBC（英国放送協会）のアナウンサー訓練法であったという。イギリスではBBC放送のアナウンサーの使うことばが標準とされ、早くからアナウンスや放送用語などについての調査と訓練がすすんでおり、特に、アナウンサーの使う用語にはロバート・ブリッジス、バーナード・ショー、ダニエル・ジョーンズなど著名人が加わり、放送英語の発音について審議を行う口語委員会が設置されていた。日本における「アナウンサー学校」や『アナウンス読本』などアナウンサーの教育訓練は、このBBCでのアナウンサーのあり方やアナウンサーの訓練法を意識したものであり、アナウンサーは「話しことばの規範」となることが目標として掲げられるようになった。（『アナウンサーたちの70年』1992、pp56-64）

こうして、アナウンサーとは、「話しことばの標準の使い手」であることが第一義であること

の合意形成がなされていき、アナウンサーとしての専門教育として、標準語の会得にむけての方法論が洗練されていくこととなる。

標準語の会得とは、おもに、正しいとされる発音と正しいアクセントの修得である。<sup>(5)</sup>

それでは、表現技法はどうであろうか。当時、主流であった「淡々調」といわれるアナウンスとは、「伝達者の主観を交えない、淡々として、而も上品」なものとしており、戦前のアナウンサー教育は、発音、イントネーション、ポーズの取り方などの基礎的な訓練を受け、聞きにくいと思われる個人の癖がとり除かれたうえで、「アナウンサーは主観をいれてはいけない」ということが徹底された。そのような表現技法が規格化されていくなかで、NHK 調のアナウンスともいうべきスタイルができあがっていったのである。<sup>(6)</sup>

しかし、「淡々調」のアナウンスをはじめ、原稿を読むための技術論や方法論の検討がなされ、アナウンス理論確立の努力が実を結びかけていたが、戦争によってその芽はつみとられていく。

太平洋戦争が勃発し、アナウンスは「雄叫び調」一色になっていった。<sup>(7)</sup>

### 2-3. 『アナウンス読本』公刊

戦後、応召により手薄になった放送局は、外地からのアナウンサーをはじめ、職員の帰還によってようやく息を吹き返しつつあった。戦時中にそれぞれの地域で採用した臨時のアナウンサーも含め、戦争中は教育、研修はまったく行われていなかったため、地方局に対する聴取者の批判、要望が増加し、再教育の必要がアナウンス内部でも問題化するようになる。

アナウンス課長・浅沼博は、アナウンサーの全国的な人事、教育の再編成を考え、なかでも標準語による正確なアナウンスメントの再教育、多角的な番組に対応する表現、描写力の訓練などを具体的な目標とした。

1955年、放送開始30周年を記念する事業のひとつとして、『アナウンス読本』が公刊されることとなった。一般の人からの要望も多く、また、民間放送の開局が全国的な展開を見せているという背景もあった。

『アナウンス読本』は第一章から第三章までが、日本語の標準語の発音とアクセントにさかれ、第四章は外国語と外来語、第五章が放送の用語についてであり、第6章が表現技術の基礎、最後の第7章が実習という構成である。

アナウンサーの職能とは、まず「標準語」の修得にあることが一目瞭然である。

それでは、なぜ、アナウンサーのことは標準語でなければならないのだろうか。

「誰にもわかることば—この条件をみたすものは標準語です。アナウンサーは話しの内容を伝えるという、アナウンスの目的を達成するために標準語を使わなければならないのです。もう一つの理由は、アナウンサーは標準語を普及させ、日本語を良くするという社会的な任務を持って

いることです。(中略) ラジオやテレビから流れるアナウンサーのことばは、意識されているかどうかは別として、次第に国民のことばとなり、日本語の基準を示すものとなっていきます。アナウンサーが美しい標準語を話さなくてはならないという社会的責任は、ここから生まれてくるのです。」(『アナウンス読本』1955、pp1-6、『テレビラジオ新アナウンス読本』1962、pp15-19)

標準語を普及させ、国民のことばとする。これが当時、アナウンサーたちに課せられた第一義の任務であった。

1951年の中部日本放送(CBC)を皮切りに、民間放送が次々に開局する。CBCの教育にはNHKの元ディレクターや、NHKアナウンサー和田信賢や松内則三らも参加した。「名古屋ことば」によるアナウンスも考えられたが和田や松内が反対したという。民放の開局に伴い、NHKのアナウンサーから転出するものが出てきた。1951年にNHKを退職し、ラジオ東京にはいった吉村光夫によれば、アナウンス部は、NHKアナウンサー経験者および旧満州電信電話株式会社出身者などのグループと、民放が独自に公募した人たちのグループに大きく分かれており、意外にも、未経験者のグループが標準語堅持派と見受けられたという。だれもが、アナウンスとは“NHKのように”と思い込んでいた。1925年の東京放送局の開局から四半世紀、NHKのアナウンサーたちによるアナウンスの教育研修の成熟が、NHK調と呼ばれる、アナウンスの規範を成立させていたのである。(『アナウンサーたちの70年』1992、pp176-183)

### 3. 新たな“声”に向かって—アナウンス表現技法の変革—

「ここ数年、テレビはもとより、ラジオのアナウンスも飛躍的に変化した。それは急速にテレビ、ラジオが国民の生活の中に入り込んでいったからである。今までの型にはまったアナウンス、かみしもをつけたアナウンスではもう通用しなくなった。アナウンスの世界にも、新しい革命が起こったのである。」(『テレビラジオ新アナウンス読本』、1962)

「コミュニケーションとは温かい心の通い合いです。そのコミュニケーションの手だてとしてことばを考えた場合、そこに人間的な温かい心がこめられなければならないことはいうまでもありません。アナウンサーに、人間的なぬくもりが絶えず要求されるのは、極めて当然のことです。」(『NHKアナウンス読本』1970、pp15-18)

#### 3-1. 規格化された“声”への批判

アナウンサーの教育研修制度が整い、訓練されたアナウンサーが放送で活躍するようになると、NHK調といわれる“アナウンサーらしさ”に批判が寄せられるようになる。

大宅壯一は、草創期のアナウンサーを「日本の知識人が携わっている職業のなかでは、もっとも新しい部類に属するもの」であるとし、そうした新しい職業のフロンティアであった初期のアナウンサーたちの“型”をつくりあげていくプロセスのなかでの個性を再評価した。そして、アナウンサーの「雄叫び調」と「淡々調」という二つの型について言及したうえで、“アナウンサーらしさ”を次のように批判している。

「戦時中大いにもてはやされた前者が戦後姿を消し、いまは淡々調一色でぬりつぶされていることはいうまでもない。(中略)かれらは声ばかりでなく、人間そのものにまで、NHKのマーク入りのはっぴといって悪ければ、マスクをかむっているとしか思えない。」(大宅、1949)

「専門学校卒業以上の学歴と、東京育ちという制限資格をそなえた応募者のなかから、当時日本一といわれたむずかしい競争試験をパスして採用され、さらに標準語というより『NHK語』なるものと、NHK的常識をたたきこまれ」という訓練による“アナウンサーらしさ”が、あろうことか、訓練のなかで排除してきた「個性」のなさゆえに批判されるようになったのである。

アナウンサーの読みは皆同じように聞こえるという批判には、放送メディア(ラジオ)に対する人々の関心の高まり、民間放送の開局とその比較、また、アナウンサー以外の放送出演者の増加などといった背景がある。放送記者の現場からのレポートなど、朴訥で素朴なしゃべり方がかえって新鮮な響きを人々に与えたことなども手伝い、アナウンサーの個性のなさへの批判へとつながっていった。<sup>(8)</sup>

### 3-2. 「個性化」への期待

標準語の使い手として、「日本国民に標準語を伝えること」をその任務として、アナウンサーの職能は洗練され、確立した。標準語を会得し、訓練されたアナウンサーが輩出されるようになると、皮肉なことに、その訓練によって排除された「個性」が要求されるようになっていく。アナウンサーにとって、たとえ東京出身者であっても、「標準語」は訓練によって会得しなければならない技能である以上、「放送アナウンスとして必要な表現上の条件を同じように備えた、何年かの経験をつんだアナウンサー達がニュースとか天気予報とか、同じ種目、同じ方の原稿による放送を、1日に何回も放送する以上、アナウンサーが餘程奇異な表現をしたり、或いは聴取者が餘程注意深く聴いていなければ、東京の五十餘名の各アナウンサーの區別はつかず、同じようにきこえるのは當然」(山村、1951)なのは当然の帰結である。

一定の規格化が成功したうえで、さらなるアナウンス表現技法の成熟が期待されるようになったとっていいであろう。

1954年、当時のアナウンス部副部長・山村恒雄は、全国アナウンス研究会で、各地の若いアナウンサーを前に「自然なアナウンス」を提唱した。「話しかけ調」のスタートである。山村は「アナウンスメント人なり」と繰り返し、表現が正確であり技巧的であるだけでなく、「聞く人の



心にふれる」つまり「血の通ったアナウンス」でなければならず、表現の基本となるのは「自然さ」であり、「型にはまったアナウンスではなく、自然なアナウンスになるということは、勢いそのアナウンサーの個性が滲み出て来る結果を来す」と説いてみせた。(山村、1951)

『アナウンス読本』(1955)は「標準語」に重きがおかれた内容であったのが、『テレビラジオ新アナウンス読本』(1962)では、標準語の理論を中心とする基礎編に始まり、ニュース、インタビュー、報道実況、スポーツ実況、朗読、司会という実習編に頁をさいた構成へと変更が加えられた。第5章のアナウンスの要件を説明するところでは、テレビとラジオアナウンスの違い、そして、番組の形式によるアナウンスに相違があるという前提のもと、放送にあたってのアナウンスは、まず「正確さ」にあることが述べられている。のちにアナウンサーも専門化すべきだとさかんに議論されるようになるのだが、この頃、すでにこの問題にもふれつつ、「専門化の前に、すべてのアナウンスに共通する表現技術の基礎」を確認する内容となっている。さらに、「話しかけ調」といわれるように、原則的にアナウンスは日常的な調子が好ましいこと、そして、個性は出すのではなく、にじみでるものであるということが繰り返し述べられている。(山村、1951)

当時のアナウンサーの「個性」への期待が増大し、アナウンサー自身の「個性」への模策がうかがえよう。

### 3-3. 新たな「職能」の登場「きく」

『NHK アナウンス読本』(1970)では、「不変の基礎技術」と「時代に対応した応用技術」の二本立ての構成がなされており、「標準語」に変わって「共通語」が登場する。「共通語」とは、全国共通のことばを指すのであり、「標準語」とは理想の姿としてまとめあげられたことばであると定義した。そして、アナウンサーの使うことばは「共通語」なのであり、「時代に対応した応用技術」として、テレビ時代にふさわしく、スタジオでのふるまい、服装、メーキャップから視線、そして、スタッフとの仕事の進め方にいたるまで、原稿をいかに読むかというアナウンスのみならず、放送出演者として拡大しつつある業務に対応した内容となっている。特筆すべきは、「インタビュー」にひとつの章が当てられていることである。アナウンサーの職能は「読む」「話す(語る)」が基礎的な要素だと考えられてきたが、「放送の素材や演出などが複雑多岐をきわめるようになってくると、放送の中心あるいは先端で、毎日の仕事を消化するアナウンサーにとっても、インタビューは応用問題なんだから、ゆっくり勉強すればいいなどとは言っていられなくなって」きたのであり、アナウンサーの職務のひとつに「聞く」という項目を加える必要を説いている。そして、インタビューを構成する際の“起承転結”を考えなければ成らないこと、またインタビュアーの心構えとして、出演交渉のしかたであるプレアプローチのとりかた、アプローチ、つまり取材対象者のリサーチのしかた、本番における質問の設計のしかたや、雰囲気作りやよい相づちの打ち方までも説く、ことこまかなマニュアルである。

司会や、報道番組における中継レポートがどうあるべきかなど、アナウンサーの業務内容が現在に近づき、「放送ジャーナリスト」としての職能への期待がみてとれよう。

#### 4. 揺らぐ「アナウンサーの職能」

「アナウンサーは、この多様な、番組という形をとる情報伝達の中で、多くの職種が準備を重ねた最後の段階で、音声言語による表現を担う職種です。それがアナウンサーの役割です。」  
（『NHK 新アナウンス読本』1980、pp12-13）

##### 4-1. 「職能」の再確認「よむ」「きく」「実況する」

『NHK 新アナウンス読本』（1980）は、これまでのアナウンス読本と同じように、共通語の発音、アクセント、語り口調をはじめとする基礎編、そして、実用的な応用編とにわかれており、基礎編の前に「放送とアナウンサー—アナウンサーを志す人のために」という文章が寄せられている。この文章は、1. アナウンサーの役割、2. アナウンサーの職能、3. アナウンサーの資質から成っている。こうした文章があらためて、しかも読本の冒頭に載せられている背景には、アナウンサーとは何ものか、アナウンサーの職能とは何かが問われていることに他ならない。

アナウンサーは、その社会的ニーズに応えようと努力しつつも、常に自らの専門性と対峙してきた。急速に発展する放送メディアのなかで、タレントや記者などことばの訓練をうけてない出演者が増加する一方、訓練によって規格化された“声”は、批判にさらされた。この時代は、アナウンサー個々人が、どのようにして“アナウンサーらしさ”という枠を打ち破ることができるかを模索したとっていいであろう。しかし、『NHK 新アナウンス読本』（1980）は、次のように述べる。アナウンサーにとって、自分の考えや個性を出すことがまずあるのではなく、放送の中でまず担うべき使命がまずあるのであり、その役割に集中している時に、人から見て魅力があれば、ひとがそれを個性という、つまり、個性とはあくまでも結果なのだということを。個性がないという批判にさらされ、自分たちの個性をどのように表現すればよいのか悩むアナウンサーに対して、「放送の中で担う役割」をまっとうした結果として「個性」がにじみ出るのだと、繰り返し説いている。

アナウンサーの役割については、番組の歯車のひとつであり、多様な、番組という形をとる情報伝達の中で、多くの職種が準備を重ねた最後の段階で音声言語による表現を担う職種であり、アナウンサーは番組の主役ではないとしている。放送番組の中では、主役はあくまでも“情報”なのである。

それでは、アナウンサーの専門性とは何であろうか。

『読本』は「音声表現の担い手として、アナウンサーは何ができなければならないのか。共同

作業者である他の職種から共通部分を差し引いて、なお峻別される特性、誰も他に代わることができないと尊重されるべき特性は何か。それは、つきつめて言えば、『よむ』『きく』『実況する』という、高度に熟達を必要とする技能である。この3つがアナウンサーの役割の基礎であり、他の追隨を許してはならない職能であり、『よむ』『きく』『実況する』は、基礎であるとともにアナウンサーのすべてとも言える」と述べ、「個性」にふりまわされることなく、アナウンサーの原点の再考を促した。(『NHK 新アナウンス読本』1980、pp13-17)

放送番組が多様化するとともに、初期アナウンサーに求められた職能である「共通語」(「標準語」)で原稿を正確に読むという技術だけではプロフェッショナルとはいえないこと、「個性的であれ」という期待にふりまわされることなく、「よむ」「きく」「実況する」というそれぞれの職能を深化させることの必要性が再確認されている。

『アナウンス読本』(1970)から登場してきた「きく」という職能について、『NHK 新アナウンス読本』(1980)では、「放送の仕事は、きくということの累積」であり、「記者もプロデューサーもアナウンサーも、放送にたずさわるものは全て、この「きく」ということを繰り返していく職業」であり、「日一日と、このきく能力を高めていくのが、ジャーナリストの道」であるとし、アナウンサーもジャーナリストであるという宣言をも行っている。

「よむ」「きく」「実況する」という三つの職能はいずれも「限りなく広く、限りなく深い」もので、「一生をかけても及ばない」世界があり、これらがアナウンサーの役割の基礎であり、他の追隨を許してはならない職能であると述べられている。また、「話す」という分野に関しては、伝えるために話すのであるから、この三つの職能の経験の集積の上こそ成り立つとした。

アナウンサーの資質としては、まず「正しい言葉」の使い手であること、日本語を正しく伝えられる声をもつための「健康な肉体」、そして「放送人魂」があげられている。

「よむ」「きく」「実況する」ことこそアナウンサーの職能であるということに対する「それでは単なる技術屋ではないか。自分をもっと主体性のあるジャーナリストでありたい。」「技術は技術として習得するが、基礎ができれば、内容や個性をもちこみたい。」という反論には、「よむ」「きく」「実況する」対象は、世の中の「情報」すなわち、他人の経験の世界、或いはその集積としての文化であり、対象が少しでもよく見えてくることによって、少しでもよく「よむ」「きく」「実況する」ことができ、「よむ」「きく」「実況する」技術が少しでもよくなることによって、更に対象がよくみえてくる。その見ているシンにあるものが、自分の経験であり、その集積としての自己の主体であると答えている。また、「個性、個性という時代であるが、個性は出すものではなく、他人が認めるものなのであり、職能に徹して生きている人のなかに、幾多の豊かな個性が育っているのだ」と、一見華やかに見えるアナウンサーの専門性とは、地道な不断の努力によってしか獲得することができない職能であることが繰り返し説かれている。<sup>(9)</sup>(『NHK 新アナウンス読本』1980、pp20-21)

#### 4-2. リポートという分野 放送ジャーナリストへ

技術革新は進み、ビデオ映像機器は小型化、簡便化した。どんな場所でも簡単に出かけていき、中継や録画ができるようになったことが「リポート」という新しい演出方法を生み出すことになる。リポーターによって情報を伝えようという番組が全国の放送局でさかんに制作されるようになった。

NHK では、『ニュースワイド』が始まった1980年にミニハンディカメラと関連機器が全国の放送局に配備され、また1985年度で東京におけるフィルムの現像処理業務の運用は停止された。速報性、機動性、映像の臨場感など、ビデオはフィルムとはくらべものにならない威力を発揮し、フィルムからビデオへ報道の転換が加速していった。

アナウンサーをリポーターに育てようという動きは、1970年にさかのぼる。『スタジオ 102』という番組で、メインキャスターの川上裕之をバックアップする形で、3人のサブキャスターが連日のようにリポーターとしてブラウン管に登場した。まだフィルムの時代であり、記者によるリポートはなく、ディレクターの企画によるアナウンサーとの共同制作であったという。

当時の『スタジオ 102』の責任者・報道局社会番組部副部長の渡辺泰雄は、アナウンサーをリポーターとして起用した理由を次のように語っている。

「記者のトークに個人的なバラツキが多く未熟な面が依然として続いていたので、番組の品質安定を考えてのこと。記者はクラブ取材が中心で隙間が多すぎる、遊軍的な自由な立場で行動できるものを必要としたこと、アナウンサーを取材者として育てようとした。」その結果、「記者リポートへの良い刺激になった。公害裁判など事象が多岐にわたって厄介なことは一人の記者ではカバーしきれない、そんなとき、アナウンサーに現場中継で記者が取材したものへの聞き役、あるいは引き出し役として、いわばキャッチャーをつとめてもらった。そのことによって問題の位置づけをやってもらった。記者とアナウンサーの役割分担がうまくいっていると放送の結果はよかった。」(『アナウンサーたちの70年』1992、pp347-354)

アナウンス室にリポーターグループがつくられたのは1972年であり、1974年に始まった『ニュースセンター9時』にも、このリポーターグループが参加している。当時のアナウンサーの研究集会では、リポーターには取材能力、視点や分析力、編集の力が、表現力と同じような重要さで問われることが何度となく議論され、取材にもとづいた表現の方法が話題になっている。機材の小型簡便化はすすみ、「読む」ことよりも、「話す」ことの表現力がいっそう求められるようになっていった。テクノロジーの進化がアナウンサーに期待される職能を拡大させる結果となった。

アナウンサーは正しい日本語の使い手であるだけでなく、リポーターの時代にふさわしい放送ジャーナリストとしての基本的な能力が問われるようになったのである。

『NHK 新アナウンス読本』(1980)の後半・応用編の第1章はニュース、第2章はリポートであり、「リポート」が、アナウンサーにとって重要な職能のひとつになっていたことがわかる。

また、1974年に始まった『ニュースセンター9時』は、報道局外信部長であった磯村尚徳によるキャスターニュースであり、以後、放送メディアの報道はキャスター時代を迎えることになった。(『アナウンサーたちの70年』1992、pp336-359)

## 5. 多様化する放送の送り手として

「社会や人々の意識の変化、放送の形態の変化に伴い、アナウンサーに求められるものも、時代とともに少しずつ変化してきました。近年は大型の生放送の番組が増え、瞬時的確な判断力や、大勢のスタッフと力を合わせて番組をまとめ上げるリーダーシップなどが、今まで以上に求められています。また多チャンネル化によって、さまざまな専門的分野を極める番組が増え、専門知識を持った個性的なアナウンサーも数多く必要です。双方向の放送では、相手のどんな発言にも、決して人を傷つけることなく、柔軟に対応できる放送人としての高度なセンスが求められます。もちろん、『よむ』『きく』『司会する』『中継する』といった専門能力に関しても、さらに高度な『プロフェッショナルな仕事』が期待されています。今、アナウンサーに求められているものは実に多様で、しかも高度なものになっています。」(『新版 NHK アナウンス・セミナー 放送の現場から』2005、pp1-3)

未公開の1冊、公開された5冊を経て『NHK アナウンス・セミナー』(1985)は、未来へ向けての第一歩と位置づけられた。

『NHK アナウンス・セミナー』(1985)は、放送の送り手が自由化、多様化し、プロ・アマ混在時代といわれる時代にあって、「アナウンサー、記者に限らず、今後ますます多様化する放送の送り手として生きようとしている人」を対象に書かれているのが特徴である。アナウンサーやアナウンサー志望者に対して書かれたこれまでの『読本』から、「アナウンサーをはじめとする放送の送り手」に向けて書かれた『アナウンス・セミナー』への転換点である。

『NHK アナウンス・セミナー』(1985)では、これまでの放送の歴史の中でのアナウンサーのとりくみやその変容が述べられた上で、アナウンサーは、パブリックスピーキングの追求者たらんことを確認し、ことばの基礎について、共通語、口調、敬語や放送用語についての説明が行われる。続いて、キャスターの資質と条件、ニュース、レポート、スポーツ、ナレーション、インタビュー、ラジオのアナウンス、そして、座談会、討論会、ワイドショーの司会と芸能番組の司会というジャンル別の構成となっている。

そして、最新の『新版 NHK アナウンス・セミナー 放送の現場から』(2005)は、多様化した放送のジャンルごとに、50人近くのアナウンサーが執筆するというスタイルである。

特徴は、まず、現場での仕事から始まることである。報道という分野ひとつをとってみても、

キャスター、リポーター、ニュースリーダーと、役割はひとつではない。

思えば、80年代、90年代は、放送出演者のボーダーレス化がすすんだ時代であった。報道ジャンルにおいては「キャスターの時代」が到来し、現在では、歌手や俳優、タレントが報道番組を担当することも珍しい現象ではなくなった。90年代は、「女子アナブーム」をはじめとして、アナウンサーのタレント化が話題になった時代でもある。「女子アナブーム」はアナウンサーのタレント化であるが、アナウンサーが、それまでの職域を超えてバラエティ番組に登用されるようになった。アナウンサーがタレントのように扱われ、情報バラエティ番組の司会には多くのタレントに登用されるようになり、放送番組の職務におけるボーダーレス化が急激に進んでいる。<sup>(10)</sup>

現在のアナウンサーには、初期『アナウンス読本』が説いた、実践編の応用能力に重きが置かれ、「よむ」「きく」「司会する」「中継する」といったアナウンサーの基本的機能のさらなる多様化、高度化への期待に対応できる「プロフェッショナルな仕事」が求められている。

既刊の『アナウンス読本』は、まず放送表現の基礎を最初にあげ、共通語の説明を行っていたが、『新版 アナウンス・セミナー 放送の現場から』(2005)では、「基礎編・放送表現の基礎」は最後にふれるにとどまっているのは象徴的であるといえるだろう。<sup>(11)</sup>

## 6. アナウンサーのこれから

ラジオ放送開始からアナウンサーは、時代とともにその「職能」を変化させてきた。

草創期、「よく通る声」の持ち主であったアナウンサーは、放送の話者であった。

国民の「ことば」に対する関心が高まるにつれ、アナウンサーの標準語（のちに共通語）教育が組織化されるようになり、アナウンサーのことばは「国民のことば」である「標準語の模範」として位置づけられ、アナウンサーの職能は「標準語の使い手」と考えられていた。

ラジオの中心にはいつもアナウンサーがおり、報道、娯楽、スポーツ実況といったそれぞれの分野におけるアナウンスのありようを模索し続けた。現在のあらゆるジャンルの番組進行の原型はアナウンサーが作ったといってもいいだろう。アナウンサーはいつも、放送表現の開拓者であった。

民間放送の開局や番組の増加によってアナウンサーの活躍の場は拡大した。同時にアナウンサーではない放送出演者も増加したことに伴い、アナウンサーはその「個性のなさ」ゆえに次第に批判にさらされるようになる。<sup>(12)</sup>

アナウンサーは、「個性化」にむかい、専門性がゆらいでいく。そうした傾向に『NHK アナウンス読本』(1980)は「よむ」「きく」「実況する」というアナウンサーの職能を再確認するよう促し、同時に、アナウンサーは放送ジャーナリストであるという宣言をしてみせた。アナウンサーの職能の拡大である。

現在、アナウンサーが担う現場のジャンルは多岐にわたっている。多チャンネル化がすすみ、テレビ番組のジャンルも細分化され、「よむ」「きく」「実況する」という基本的なアナウンス技能とは別の、時には放送ジャーナリストとして、また、時には情報バラエティの「放送素材」として「情報を伝える」職能が求められているのだ。

社会言語学者・真田信治は、マスメディアによって日本語の均質化が80年代に完成したのではないかと述べているが（真田、1991、2007）、だとすれば、「標準語（共通語）を国民のことばとする」という、初期アナウンサーの目標はある一定の成果をおさめたと考えられる。アナウンサーはその役割を終えたといっているのではないか。<sup>(13)</sup>

アナウンサーにとって、アナウンス技能の修得が不要になったわけでは決してないが、放送メディアに社会化された世代にとって「標準語（共通語）の修得」という課題はそう困難ではなくなったのかもしれない。

それでは、アナウンス技能が特殊技能とはいえない時代のアナウンサーの専門性とは何であろうか。採用では、NHKでは「放送ジャーナリスト」としての資質が、また民間放送では、「ステーションイメージの向上に寄与する」テレビマンとしての資質が問われるという。

放送におけるジャンルは多様化し、アナウンサーの業務は分化し、専門化し、複雑化がすすんでいる。現在のアナウンサーは、基本的技能のマスターを前提とした上で、専門的知識と経験を積んだエキスパートとしての放送の送り手であることが要求されている。

アナウンサーの行く手は、困難に満ちている。いつでも配置転換のありうる厳しい状況であり、競争もますます激化している。しかし、放送史を振り返ってみれば、アナウンサーは、放送文化における表現の開拓者であった。放送文化のあらゆるジャンルにおける形式を作り出してきたのはアナウンサーではなかったか。

現在を生きるアナウンサーの「個性」が、今後もさまざまなフィールドを開拓し、多メディア時代の放送における新しい職能を作り出していくことを期待したい。

---

(1) 石田佐恵子は「女子アナ」パッシングは「女子アナ」ブームで扱われている〈有名性〉は偽りの〈有名性〉であり、「女子アナ」たちを偽りの〈有名人〉つまり、本物の実力をもたない存在とみなすところにあると分析している。（石田、1999）

(2) 鈴木健司は、CSの多チャンネル化によってアナウンサーに求められる職能（職域）は広がる一方であり、制作現場からのニーズをまかないきれなくなっている現況で、フリーランスのアナウンサーの活躍の場が増加していると指摘した。非正規雇用であることは待遇面での問題を抱えていることは事実である。（鈴木、2007）ちなみに、アナウンサー業は1985年制定の労働者派遣法の専門的業務26職種のひとつである。

(3) 日本最初のアナウンスは「JOAK、JOAK、こちらは東京放送局であります。」というもので、アナウン

スというよりコールサインである。この頃のアナウンスは一般に美文調もしくは朗々調といわれる呼びかけ調のものであった。(藤久、1983)

- (4) 東京で一斉に採用され、三ヶ月の研修期間を経て各局に派遣された1934年入局者は“一期生”と呼ばれる。
- (5) 標準語の発音・アクセントの訓練は、鼻濁音を含む50音の発音に始まり、母音の無声化のしかたや、名詞や動詞、形容詞、副詞、複合語のアクセントの規則を学ぶ。
- (6) 「アナウンサーは絶対にスターたるべからず」終戦までNHKが守り通した金科玉条であった。(市村、1953)
- (7) 雄叫び調とは、戦時下、「突撃ラッパ」のように戦果を絶叫するアナウンスである。戦前にはわかりやすい話しことばをめざしてきたにもかかわらず、漢語や文語表現に逆戻りした時期でもあった。(『アナウンサーたちの70年』1992、pp98-126)
- (8) 吉見俊哉は、草創期の電話文化のなかで交換手の“声”が合理化され、規格化されることで、豊かなコミュニケーションを担った“声”が道具化していく過程を論じた。(吉見、1995) また、ラジオ放送者の“規格”が解体され、“個性”が要請されていくプロセスについては拙稿を参照されたい。(北出、2002b)
- (9) 杉澤は、現在のNHKアナウンサーの採用では、発音やアクセントの基準よりも放送ジャーナリストとしての資質を第一に考えざるをえないと述べている。(杉澤、1992)
- (10) 荻野祥三は、「アナウンサーのアイデンティティの危機」は、放送文化が成熟し、従来のアナウンサー的な仕事をこなすことができる記者やタレント、専門家が増えたことにも原因があるのではないかと指摘している。(荻野、2007)
- (11) アナウンサーは「言葉の専門家というより、いいかえるならば“言葉の専門家もめざす人”であって、伝えるべき情報やメッセージを的確な表現を使って視聴者に分かってもらうことが仕事」であると鷹西美佳は述べている。(『新・調査情報』52号、2005)
- (12) 高度経済成長期、テレビはワイドショー全盛時代、ラジオはパーソナリティ時代を迎えることとなり、多くの個性的なアナウンサーが出演し、人気を博することとなった。
- (13) アナウンサーの配転命令の効力が問題になった裁判が数例ある。70年代の判例ではアナウンサーの技能を特殊技能としては移転無効になっていたが、2000年九州朝日放送事件では、初の最高裁判決として配転命令無効請求が棄却された。原昌登は、その背景に社会の変化とともにアナウンサーの技能を特殊なものとして認識しなくなったことと、アナウンサーも実務を通して専門能力を修得していくのであり、一般的な大卒ホワイトカラー層労働者とくらべても特殊性の高い労働者といえなくなっていると解説している。(原、2000)

## 参考文献

- 藤久ミネ、1983、「ことば文化としてのラジオ」『放送文化論』ミネルヴァ書房。
- 原昌登、2000、「労働判例研究 11 アナウンサーとして長年勤務してきた労働者に対する異職種への配転命令とその効力 九州朝日放送事件」『法学 2000』東北大学労働法研究会。
- 石田佐恵子、1999、「『女子アナブーム』を創出する新たな〈有名性〉のメカニズム」『論座』3月号、朝日新聞社。
- 北出真紀恵、2002a、「ラジオにおける女性ラジオパーソナリティの役割」



- 『マス・コミュニケーション研究』61号、日本マス・コミュニケーション学会。
- 、2002b、「地域をつなぐ『声』音響メディアにおける『声』とジェンダーの変遷」  
『年報人間科学』23号、大阪大学大学院人間科学研究科。
- 小玉美意子、1989、『ジャーナリズムの女性観』学文社。
- 、1996、「放送の女性史」『女と男の時空 日本女性史再考IV』藤原書店。
- 長島金吾、1952、「アナウンサー学校余聞」『放送文化』07号。
- NHK アナウンス・セミナー編集委員会編、2005、『新版 NHK アナウンス・セミナー放送の現場から』  
NHK 出版。
- NHK アナウンサー史編集委員会編、1992、『アナウンサーたちの70年』講談社。
- 日本放送協会編、1955、『アナウンス読本』日本放送出版協会。
- 、1962、『テレビラジオ新アナウンス読本』日本放送出版協会。
- 、1970、『NHK アナウンス読本』日本放送出版協会。
- 、1980、『NHK 新アナウンス読本』日本放送出版協会。
- 、1985、『NHK アナウンス・セミナー』日本放送出版協会。
- 日本女性者放送懇談会編、1994、『放送ウーマンの70年』講談社。
- 荻野祥三、2007、「時代が彼らに求めたものは？」『新・調査情報』67号。
- 大宅壮一、1949-1981、「アナウンサー論」『大宅壮一全集』第3巻。
- 真田信治、1991、『標準語はいかに成立したか』創拓社。
- 、2007、『方言は気持ちを伝える』岩波ジュニア選書。
- 柴田秀一・鷹西美佳・吉澤一彦、2005、「タレント性か、正しい日本語か。」  
『新・調査情報』52号。
- 杉澤陽太郎、1992、「NHKの新人アナウンサー研修」『文部時報』2号、文部省。
- 鈴木健司、2007、「アナウンサー（局アナ）は『タレント』か『専門職』か」  
『新・調査情報』67号。
- 山村恒雄、1951、「特集 アナウンスメントの研究」『放送文化』11号。
- 、1953、「アナウンサーのこぼの訓練」『児童心理』7号。
- 吉見俊哉、1995、『「声」の資本主義 電話・ラジオ・蓄音機の社会史』講談社選書メチエ。

\* 参考文献である『アナウンス読本』（1955）および『テレビラジオ新アナウンス読本』（1962）は、東海学園大学人文学部沖野皓一元教授、高野春廣教授に私蔵のものをそれぞれお借りした。感謝申し上げますとともに、両氏がNHKアナウンサーとして活躍された歴史に心から敬意を表したい。